

1 日時 令和6年10月7日（月） 午前10時から正午まで

2 参加者

(1) 委員

- 特定非営利活動法人 くらしえん・しごとえん 代表理事 鈴木 修
- 五島地区自治会連合会 会長 鈴木美佐男
- PTA会長 渥美 祥子
- 浜松学院大学 現代コミュニケーション学部教授 子どもコミュニケーション学科長 笹原 康夫
- (株)日本マクドナルドフランチャイジー 株式会社フロム東海 代表取締役 山田 晴茂
- 南障がい者相談支援センター センター長 大場 拓弥
- 浜松市防災学習センター センター長 藤田 具克

(2) 教職員

校長、副校長、教頭、事務長、小学部主事
中学部主事、高等部主事、教務課長、進路支援課長
情報教育課長、CS担当



3 次第

(1) 校長挨拶

- ・外部からの応援をいただくということについて、以前、ニュージーランドの特別支援学校の話聞いたことがあるが、昼食時は、教員は子どもから離れ、地域の方々が子どもたちと過ごしているとのことである。本校は応援を受けることについてまだまだ不慣れなところがある。
- ・進路・福祉グループのテーマの「現場実習の評価表の見直し」については、ここで検討した実習評価表の書式が浜松市や県内への統一書式になるとよい。

(2) 熟議

ア 学習・防災応援隊グループ

PTAを始めとして応援隊は増えてきているが、私たち教員が応援してくれる方をもてなそうとした
り、構えてしまったりすることがある。このような教員の意識を変えるアイデアについてパート2～教
員の業務の見直し～

- ① テーマ・熟議の進め方の説明 （CS担当）
- ② 教員の業務の見直しについて説明（高等部主事）
- ③ 質疑・意見等

- ・熟議のテーマの背景について、教員の定数や教員の質に課題があるのか、あるいは教員の業務を明確

にするという流れの中でのことなのか。本熟議を、本テーマのような実務的な内容について議論するのがよいか、根本的なことについて議論する方法もあるがいかか。また、応援隊を増やすということだが、小中学校に比べて、地域が入り込みにくい敷居の高さが特別支援学校にはあるのか否か。

(藤田氏)

→教員の定数や質等の根本的な部分について、本テーマの検討の視点として貴重な御意見である。今回は、教員の実務的な業務をテーマとしたが、御指摘があったような業務の見直しを考える視点もいただけるとありがたい。(C S担当)

→教員の定数は以前と比べて改善されてきている。(副校長)

→特別支援学校の地域は、小中学校の地域とは異なり広範囲で、そのことによる地域との関わりの難しさはあると思う。けれども、そもそも私たちの地域への発信の弱さもある。学校運営協議会が発足してからは自治会長やPTAへ働き掛けることが徐々に増えてきているという現状である。地域にどのように関わっていくか、発信していくかについては今後も議論が必要である。(C S担当)

- ・教員と学校事務職員との見直しが必要ではないか。教員の業務負担の軽減については、学校事務職員との役割の見直しが必須だと思う。その視点がないと教員と応援隊という関係性だけでは、なかなか進まないと思う。学校事務の専門性を生かし、学校事務が学校経営へ参画するという視点が必要である。(笹原氏)
- ・依頼したい業務について、PTAあるいは実習支援員、大学生等、依頼先を明確にするとよい。大学では、学校体験と学校支援の二本立てで考えているので、どんどん活用してほしい。ただ、学生を毎日来させるのは難しいので、イベントや曜日等が決まっていると参加しやすい。このように、依頼先の向き不向きがあると思うのでそこを整理するとよいと思う。(笹原氏)
- ・このような話が出てくるのは教員や事務職員の人員が不足しているのか、そうであれば、人員を増やすことが必要であり、そもそも学校の仕事まで地域がやるのは違う。地域ができることはやるので、依頼したいことをどんどん発信してほしい。発信してもらえれば、可能か否かを伝えることができる。ただ、地域から学校へ働き掛けることは、学校のことは分からないので言いにくい。(鈴木美氏)
- ・応援隊の定義が難しい。PTAの応援隊と地域の応援隊を分けて考えたらどうか。PTAは子どもがいるので参加しやすいが、地域の方はボランティアといっても子どもと触れ合う等のメリットがないとなかなか難しいのではないか。(渥美氏)
- ・業務の整理については、校内で検討することと応援隊に依頼することを整理した方がよい。令和8年から働き方改革で大きく変わる。事務もいろいろなことが集中化していく。その分、教員の業務を担うということになっていくだろうが、そのイメージは大学に似ていて、大学の教授は教える専門で進路は別の専門のスタッフがやっている。このような業務のすみ分けが進むとよい。(事務長)
- ・学校運営協議会が発足して3年目。学校評議委員会では学校に対して御意見をいただいていたが、学校運営協議会では学校が地域と共に子どもを育てていくことが進むよう、委員の皆さんにはまずは学校の課題を知っていただいた。今回、教員の業務を整理し直す点について教えていただいたので、次回に向けて整理し直す。(C S担当)
- ・継続のボランティア活動となると、なかなか難しいところもあるが、単発であれば可能なこともある。また、以前より伝えているが、小、中、高校との連携を進めいくことで、ボランティアも広がるのではないか。(鈴木美氏)

→そのお話を受けて、中学校や高校にボランティアを募集するようになった。昨年度は、小学部運動会のボランティアとして江之島高校生が参加している。今年度は、江之島高校が授業日で無理だったが、

江南中学校で受けてくれることになった。少しずつ広がっている。(C S担当)

- ・学校評議員会と学校運営協議会について、学校評議委員は校長の求めに応じて意見を述べる、学校運営協議会は我々が学校経営に参画していくということである。様々な応援の団体があるので、団体の特長等を考えて整理されてくれば、「これはうちでやりますよ。」等の話になっていくだろう。(笹原氏)
- ・PTAは今年、半年で保護者の応援がのべ194人。昨年度は一年でのべ174人だったの半年で昨年度を上回り、かなり定着してきた。負担がない形でということをポイントにしている。応援隊に参加することで、役員にはなれないけれど、子どものために応援できることがあれば引き続き進めていきたい。(渥美氏)
- ・最近、組織として残っているPTAは少なくなってきたと聞くと、浜松特別支援学校はよくやっている。(鈴木美氏)
- ・存続できなくなっているのは、親が学校への要望が強い等、パワーバランスが難しくなっていることがあるかもしれない。PTAは先生と親との会なので、一緒に子どもを応援していくというフレンドリーな関係での会でありたいと考える。(渥美氏)

イ 進路・福祉グループ

実習評価表の見直し

～実習評価表について、評価する側の視点で御意見をいただき、新たな評価表の書式をつくる。～

① 実習評価表の目的と進め方の説明 (中学部主事)

② 実習評価表 (案) の説明 (進路指導課長)

- ・一般企業版について本日は検討する。

③ 質疑・意見等

- ・日常生活、対人関係、作業力等の項目は適切である。採用する側としては、「時間管理」「挨拶」「身だしなみ」「報告相談などのコミュニケーション」「体力」これらの項目で難しさがあると採用時に躊躇する。一方で、器用さとか正確性等はこの時点では大きな課題ではないということがある。例えば、重要な項目が分かるように表記に強弱があるとよいのではないか。(山田氏)
- ・企業が付けやすいことが大事。また、項目に強弱を示すことについて、重要な項目は企業によって異なるということもあるだろう。(鈴木修)
- ・会社の人がフィットする言葉に変えてはどうか。「日常生活」という言葉でよい。「実習時の様子」とした方がよい。また、「生活リズム」は「時間管理」に変更する等、企業の人が記入しやすいという視点が大切である。(鈴木修氏)
- ・文字が多く、チェックしにくさを感じる。自立している、援助があればできる等、文言を整理してはどうか。具体的には、4項目であれば、「できている」、「だいたいできている」、「指示があればできる」、「できない」等。(鈴木修氏)
- ・観点を書いて、チェックは数字だけにすることになれば、すっきりする。(進路支援課長)
- ・項目の「作業への態度」は、企業は比較的付けやすいだろう。このような項目が学校として必要ならばあってもよいだろう。(山田氏)
- ・会社によって重要項目は異なるということなので、例えばこれらの項目の中で、企業で特に重要としているところを事前に聞き、そこにマークを付けるというのはどうか。(進路支援課長)

- ・それでよいと思う。また、総合評価欄で今後の実習受け入れについて、引き受けるか、引き受けることは難しいという2択ではなく、課題を書いてもらうようにする。そのことでこの課題がクリアできれば引き受けられると分かる。1. 2年用も同様で、会社の事情で受け入れられないのではなく、生徒の課題であることが望ましい。(鈴木修氏)
- ・生徒に見せるとなると企業側は本人の意欲を高めてあげたいと思うので、悪いとは書かない。頑張りを認める評価になる。生徒に見せる評価表と教員への評価表は変えてもいいのではないかな。例えば、挨拶がよくないとき、あえて、あの時の挨拶は良かったとできていた場面を評価して、本人に自信をつけるようにしている。(山田氏)
- ・山田さんのような評価をしてくれる会社ばかりだとよいが、そのような企業は多くない。会社の善意で人事が一生懸命やっても、現場に浸透していないことはある。採用はしても現場任せなところが最近が多いと感じる。(鈴木修氏)
- ・今のことは本質で、企業の意識を変えていかないとこのようなことは続くだろう。(山田氏)
- ・学校の先生は生徒を伸ばす立場で、関係性を良好に維持してほしいのであまり厳しいことは言えない。第三者であれば、ある程度シビアな評価ができる。学校の意図を汲み過ぎると優しくなってしまうことがある。誰かが厳しいことを言った方が後々苦労しないということがある。(鈴木修氏)
- ・学年主任として実習に関わったときには、企業や福祉には、課題を伝えてほしいと要望していた。就労につなげていくためにステップアップしていくには、企業が求めていることを理解した上で、実習した生徒のできていることや課題を知りたい。(情報教育課長)
- ・評価を受けた生徒の意欲のことを考えて、良いポイントを三つ、課題を三つというのはどうか。
(山田氏)
- ・特に良かった点を二重丸にする等、極力書くことを減らしてはどうか。(鈴木修氏)
- ・文字が多い。評価の文言を一つ一つ読まなくても番号に丸をつける程度が望ましい。(山田氏)
- ・これを基にしてレーダーチャート化しているところがある。入社時と比較する等、活用している。
(鈴木修氏)
- ・評価表もデータでやり取りすれば、取り組みやすいし、チャート化しやすい。(鈴木修氏)
- ・グーグルフォームであれば、データ整理できるがどうか。(進路支援課長)
- ・グーグルフォームを使うためには県へ申請する必要がある。(情報教育課長)
- ・エクセルで作成して、データを送って評価して送ってもらうだけでも効率的になる。(鈴木修氏)
- ・総合評価欄で、今後どのような指導が必要かということについて、企業側が考えるのは難しいと思う。
(大場氏)
- ・総合評価で課題を書くのであれば、それを基に学校で具体的な指導につなげることはできるだろう。
(鈴木修氏)
- ・「作業技能」の一般の人と比べてという文言があるが、比べる対象が分からないので書きにくくないか。入社何年目と比べて等、一般の基準があるとよい。(大場氏)
- ・そもそも一般の方と比べる必要があるのか。(進路支援課長)
- ・一般の人という表現はよくないが、「一般比」というとらえ方はある。(鈴木修氏)
- ・「ほぼ一人前」という表記もあるが、これらの表現は確かに引かかる。(鈴木修氏)
- ・実は人の評価は、短い期間ではできない。評価というよりも出来事とその時の行動である。(山田氏)
- ・城北分校の学校運営協議会でも評価表について見直している。委員のスズキの大石さんの考えも知りたい。このように、企業側の意見を集めることも大事。(鈴木修氏)

- ・城北分校との評価表の違いがあると思うので、情報交換しながら検討をしてみてもいい。(鈴木修氏)
- ・企業の中には内部評価(会社内だけの実習評価)と外部評価(見せてもいい評価)があるところもある。(鈴木修氏)
- ・タイプⅡの評価表について、事業所にとっては大変ではないか。実態に幅があるので項目にし難いのではないか。(鈴木修氏)
- ・生活介護関係については、フォーマットをデータにしてメールを使い、記入後郵送してもらうなど工夫している。(進路支援課長)
- ・事業所ごとに各項目の評価、できているところと課題を明確にしたい。伝えたいことがあるならばフリーの記述の方がよい。(大場氏)
- ・企業での評価と生活介護の評価の違いはあっても問題ない。(鈴木修氏)
また、企業等では独自の評価フォーマットがあるが、この実習評価表は学校の統一フォーマットであり、企業等で独自に行う分にはよいと思う。(鈴木修氏)
- ・今回いい話ができたし、課題が分かりやすいので2月の協議会で行うのではなく、月1回30分から1時間程度のZOOMでの検討会を行いませんか。(山田氏)
- ・やりましょう。(鈴木修氏)

(3) 高等部3年第5回産業現場等における実習「決意表明式」参観感想

- ・息子が中1で5年後にこういうことができるようになるのかとドキドキした。皆さん、しっかりしていた。生徒さんが言っていた就労先の名前を聞いてもまだ、ピンとこないところがある。親が主体になって進路について調べていきたい。(渥美氏)
- ・皆さんのいい緊張感と「頑張るぞ。」という気持ちが伝わってきた。「頑張れよ。」という気持ちで聞いていた。大学生も実習に行く前には挨拶について指導教官から指導している。働くということのベースになるところは同じだと感じた。(笹原氏)
- ・決意表明に向けた発表の指導はしているのか、それとも生徒だけで考えているのか。(鈴木美氏)
→指導している。(高部主事)
- ・練習した成果が出ていた。就労に向かって頑張っていた感じと聞いた。(鈴木美氏)
- ・学校でも立志式等行うが、参観者がいる中でメモを見ずに発表するのは難しいことだが、よくやっているな頑張っていると思った。実習が5回とのことだが、期間や実習先についてはどうか。(藤田氏)
→高等部の3年間で実習を行う。1年生では3～5日、2年生では10日間、3年生では15日間である。
実習先は1、2年は毎回変えていろいろな職種や作業種を経験する。3年生である程度絞っていく。
(高等部主事)
- ・中学校でも職場体験があるが、1、2日でもいろいろなことがある。特別支援学校の場合はどうか。
(藤田氏)
- やはりいろいろなことはある。5日間は頑張っても6日目から続けられなくなったり、指導や注意を受けることへの耐性が弱く、続けられなくなるケースもある。(高部主事)
- ・いい発表だった。(藤田氏)
- ・参観を通して本校の子どもしたこと、学校のことを理解してくださる方が増えた。このように学校を理解してくださる方が増えていくことが大変うれしい。さらに、ここにいる皆さんのお力を借りて本校のことを知ってくださる方が増えていくとありがたい。(CS担当)

- ・浜松みをつくし特別支援学校が近くにあり、太鼓の発表会に招待されて参観したことがある。このように、運動会で地域を呼んだり、地域に出かけたりすることをどんどんやっていけばよい。(藤田氏)
- 発信の方法については考えていきたい。(CS担当)
- ・小学部から決意表明式での生徒の様子を見ると、教員が隣にいらなくても発表できたり、自分たちでマイクを回して進めたりする姿に小学部から中学部、高等部への成長を感じた。(小学部主事)
- ・一生懸命に発表していた。聞き取れない生徒もいたが、生徒なりの表現を先生方が認めていた。

(鈴木修氏)

- ・広い場所でマイクを使っでの表明式は立派だった。この表明式だけでなく実習も頑張ってもらいたい。目標を絞って発表できていた。実習で頑張ったことを発表して評価表に本人の目標を入れてみるのもよいと思う。(山田氏)
- ・始めて参観したが、自分の言葉で発表する姿が見られた。(大場氏)

(4) 閉会

校長あいさつ

- ・皆さんを含めた地域の力を借りて、地域全体で子どもを育てていこうという命題がある。その結果、地域が活性化していくことが望ましいが、これらのことを私たちが上手に説明しながらお願いしていくことが大切であると感じている。
- ・教員の業務の見直しで事務室との関係という話があったが、特別支援学校の場合は教員の人数が多い。今後は、事務室の業務を県に集中させていく流れがある。その分、例えば事務室が防災計画書を作るなど、教員がやっていた業務を担うということも考えてくことになるだろう。
- ・実習評価表の書式について、貴重な御意見をいただいた。月に1回Zoomで集まろうという話も聞いた。皆さんが納得して使いやすい評価表の書式ができることを期待している。

(5) 連絡

- ・第3回学校運営協議会 令和7年2月27日(木) 午前10時から正午
- ・浜松特別支援学校新分校の校名を10月末まで募集。
- ・三校連携協働委員会について、年度内に生徒会のメンバーが集まって顔合わせをする予定。
- ・高等部販売会のお知らせ